様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００８６７

研究課題名（和文）第二言語としての日本語におけるオノマトペの意味拡張による習得の検証

研究課題名（英文）An investigation on semantic extension of onomatopoeia by learners of Japanese as a second language

研究代表者
玉岡　賀津雄（Tamaoka, Katsuo）

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：７０２２７２６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：外国語日本語学習者は，オノマトペの音を行動や感覚に結びつけて習得するのではなく，一般の語彙として習得すると仮定される。本研究では，中国人日本語学習者を対象に，語彙知識が擬音語と擬態語の習得に別々に寄与していることを構造方程式モデリングの統計手法で検証した。また，中国人日本語学習者は，日本語母語話者のようなオノマトペの基本義から拡張義への意味拡張による習得という連続的な順序性がないことも実証した。外国人日本語学習者においては，オノマトペを感覚的に習得する可能性は低く，むしろ一般語彙として習得していると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
外国語として日本語を学習する場合，オノマトペの習得はきわめて難しいといわれている。それは，日本語母語話者のように，オノマトペの音を行動や感覚に結びつけて習得するのではなく，一般の語彙として習得するかだと考えられる。本研究では，中国人日本語学習者を対象に，語彙知識が擬音語と擬態語の習得に別々に独立して寄与していることを実証して，日本語学習者にとってオノマトペが「擬音語から擬態語へ」という意味拡張によって獲得されるのではないっことを証明した。つまり，第２言語習得の条件では，オノマトペが感覚的に習得される可能性は低く，むしろ一般語彙として習得していることを実証した。

研究成果の概要（英文）：It is assumed that learners of Japanese as a foreign language acquire onomatopoeia as vocabulary rather than connecting them to behavior and senses. Using the statistical method of structural equation modeling (SEM), the present study suggested that lexical knowledge contributes separately to the acquisition of sound-imitation onomatopoeia and sense-mimic onomatopoeia among native Chinese speakers learning Japanese. It was also demonstrated that, unlike native Japanese speakers, native Chinese speakers learning Japanese did not have the continuous sequence of acquisition via semantic expansion from the basic through to extended concepts of onomatopoeia. Therefore, it is unlikely that onomatopoeia is unlikely acquired sensorially by learners of Japanese as a foreign language, but rather as general vocabulary.

研究分野：外国語としての日本語習得

キーワード：オノマトペ　語彙知識　擬声語　擬態語　意味拡張　構造方程式モデリング　決定木分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本語のオノマトペは幼児期の感性的体験をもとに意味拡張によって習得されるといわれている。実際，Akita（2009）は，野地（1973－1977）が収集した幼児の発話記録データから各年齢の幼児のオノマトペの出現回数を調べている。その結果，日本語を母語とする幼児のオノマトペ産出について「臨時的擬音語＞擬音語＞擬態語＞擬情語＞一般語」という語彙的類像性の階層を提案した。そして，語彙的類像性の高い擬音語から低い擬態語へとオノマトペを獲得していくと報告している。しかし，日本語を第２言語（L2）あるいは外国語として習得する日本語学習者が，感覚象徴に基づいて日本語のオノマトペを習得するかどうかについては，対立した議論がある。王（2011）は，日本語母語話者と中国人日本語学習者に 36 語のオノマトペに対しての感覚評価を求めた。その結果，中国人日本語学習者は日本語オノマトペに内在された有声・無声音に関する「重い－軽い」「強い－弱い」「気持ちよくない－気持ちよい」「うるさい－静か」「悪い－よい」の評価が，日本語母語話者と一致したと報告している。一方，中国人日本学習者は，感覚象徴的な特徴から日本語のオノマトペを習得できず，それらを一般語彙として使用しているという報告がある（中石, 2012）。また，飯田（2013）は，日本語を学習したことのない中国語および韓国語母語話者に日本語のオノマトペを音声提示して４つの動詞からオノマトペと共起する適切な動詞を選ぶ調査を行ったが，結果はほぼランダムであった。さらに，飯田・玉岡・初（2012）は，中国人日本語学習者を対象に，読解テストとオノマトペ理解テストを実施した。その結果，オノマトペの意味理解は読解とは関係が強く，読解能力の高い学習者のほうがオノマトペをより良く理解していた。この結果は，L2 の場合は，日本語のオノマトペが学習によって習得される語彙であることを示している。それなら，中国人日本語学習者には，幼児期に日本語オノマトペの感覚象徴を形成する期間を持たないので，「擬音語から擬態語へ」などの意味拡張による習得という流れはないと思われる。本研究では，以上の仮説を検討することにした。

２．研究の目的

日本語を母語（L1）として成長する幼児は，保護者との対話などを通じてオノマトペを習得する。それらを基本的な語彙と対応させながら擬音語から擬態語へと直列的な因果関係で習得が進むと予想される。一方，外国語として日本語を学習する場合（L2）は，幼児期の感覚的な言語形成期間を持たないため，オノマトペの感覚を特定の名詞や動詞と結び付けて表現することが容易ではなく，「擬音語から擬態語へ」という意味拡張による習得の流れは生じないと予想される。そこで本研究では，中国人日本語学習者を対象に，語彙知識が擬音語と擬態語の習得に別々に寄与していることを検証した。また，中国人日本語学習者は，日本語母語話者のようなオノマトペの基本義から拡張義への意味拡張による習得という連続的な順序性がないことも検証する。外国人日本語学習者においては，オノマトペを感覚的に習得する可能性は低く，むしろ一般語彙として習得していると考えられる。そこで，本研究では，中国および日本の大学に在籍する中国人日本語学習者を対象にオノマトペの習得過程について検証する。

３．研究の方法

語彙およびオノマトペの能力テストを実施して，決定木分析（decision tree analysis）および構造方程式モデリング（structural equation modelling，以下，SEM）の手法で分析する。決定木分析は，複数の独立変数（説明変数）から特定の従属変数（目的変数）を予測する分析である。より有意に従属変数を予測する独立変数から順に，階層的に要因を樹形図で描いてくれる。樹木の上

部は下部より予測力が強い要因であり，下部の要因と上部の要因との相互作用が有意な場合には，さらに枝が伸びる。また，樹形図に含まれない独立変数は有意に従属変数を予測しないことを意味する。本研究では，各種のオノマトペの正答・誤答を予測する分析を行った。直接に測定できない潜在変数を観測変数で調べる。本研究では，語彙知識を潜在変数としいて，触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペの習得への因果関係を構造方程式モデリングの統計手法で検討する。

４．研究成果

日本語の語彙知識と日中オノマトペの音韻類似性という２つの要因に焦点を絞ってオノマトペの習得を考察した。具体的には，中国人日本語学習者を対象に，テストによって語彙知識を測定した。さらに，擬音語（「がんがん缶を打ち鳴らす」）と擬態語（「頭ががんがん痛む」）として使用される同一のオノマトペ(擬音･擬態両用のオノマトペ)の理解をテストによって測定した。そして，外国語としての日本語の擬音語と擬態語の習得に，日本語の語彙知識と日中の音韻類似性がどう影響するかを検討した。擬音語と擬態語の習得に影響する諸要因を検証するために，（１）擬音・擬態語の違い，（２）語彙知識（上位・中位・下位の３群），（３）擬音語の音韻類似性（「高類似」「中類似」「低類似」「超低類似」の４グループ）の３つの独立変数でオノマトペの正誤を予測する決定木分析（分類木分析; IBM SPSS Decision Treesの統計解析ソフトを使用）を行った。決定木分析の結果，擬音語と擬態語の違いが最も強い要因であった。擬音語は54.9%の正答率であったが，擬態語は34.9%の正答率でしかなかった。本研究の中国人日本語学習者と同様に，英語を母語とする日本語学習者を対象とした研究でも擬音語のほうが擬態語より習得されやすいことが報告されている（岩崎・ヴィンソン・ヴィリョコ2005)。擬音語と擬態語の習得には別々の要因が影響していることが決定木分析で示されたので，擬音語と擬態語の正誤を決める要因について別々に考察していく。

擬音語の習得では，擬音語の音韻類似性が有意な予測変数となった。高音韻類似性を持つ擬音語は最も学習者に理解されやすく，正答率が 78.0%に達した。「高類似」グループの擬音語の習得には語彙力の影響がみられなかった。中類似度（「ぱちぱち」「つるつる」「さらさら」）と低類似度（「こつこつ」「ぺたぺた」「ばらばら」）を示したオノマトペの正答率は 58.3%とこちらも比較的高かった。これらのオノマトペには，さらに語彙力が有意な予測変数となった。上位群・中位群の正答率が 64.5%であるのに対して，下位群の正答率は 44.2%であった。中位・上位群の学習者は下位群より「中・低音韻類似」グループの擬音語をよりよく習得していた。一方，「超低類似」グループの擬音語の正答率はわずか 38.3%であった。「超低類似」グループに属する「かちかち」「がたがた」「びりびり」「ばたばた」の４語は中国語の擬音語の発音とかなり異なっており，学習者は母語からこれらのオノマトペの意味を推測し難かったと思われる。また，語彙知識にも有意な違いがみられた。上位群の正答率は 50.0%で，中位群・下位群の正答率はわずか 32.3%に過ぎなかった。

擬態語の習得では，語彙知識の影響が最も強い予測変数であった。上位群の正答率は 46.9%で，中位群･下位群の正答率は 28.7%と低かった。次に，日中での音韻類似性の影響もみられた。なお，音韻類似性は，日本語の擬音・擬態両用のオノマトペが擬態語として使用される場合と中国語の擬音語との音韻的な類似性である。上位群の学習者は，音韻類似性が有意な予測変数となった。擬態語の音韻類似性の影響で擬態語が２つのグループに分けられた。「中類似性」と「低類似性」の擬態語は，正答率が 54.2.%であった。「超低類似性」と「高類似性」のオノマトペの正答率は 39.6%となった。また，語彙知識が中位群・下位群も擬音語の音韻類似性が有意な予測変数となった。高音韻類似性のオノマトペが擬態語として使用された場合，学習者全体の正答率が低かった。日本語の擬音語であれば，中国語の発音の似た高音韻類似性の擬音語から類推して容易に意味が理解できるが，擬態語の場合は中国語には存在しないため，日本語の擬態語の意味を推測できなかったのであろう。また，また，上位群は，もともと高い語彙知識を有しているの

で，超低音韻類似性のオノマトペであってもある程度高い理解を示すと思われたが，正答率が低かった。

決定木分析の結果，日本語を外国語として学習する中国人日本語学習者は，同じオノマトペであっても，擬音語としての使用のほうが擬態語としての使用よりも正答率が有意に高かった。日本語を学習する経験のない日本語非母語話者（フランス語話者，英語話者）も，擬態語より擬音語の意味を正しく推測しやすいことが報告されている（Frei 1970，Iwasaki, Vinson & Vigliocco 2007）。そのため，擬音語としてのオノマトペの使用のほうが擬態語よりも習得しやすいようである。さらに，本研究は，擬音語と擬態語の習得に及ぼす主要な要因が異なっていた。擬音語の習得では，音韻類似性が強い予測要因となった。音韻類似性の高い擬音語のほうが日本語学習者に理解されやすい。12 語の擬音語は「高音韻類似」「中音韻類似・低音韻類似」「超低音韻類似」という３つのグループに分けられた。まず，「高音韻類似」の擬音語の正答率は高く，母国の中国語からの音韻面での促進効果がみられた。しかし，日本語学習者の語彙知識の影響がみられなかった。これは，中国語の擬音語から日本語の擬音語が容易に推測できたためであろう。一方，「中音韻類似・低音韻類似」と「超低類似」の擬音語の正答率は低く，語彙知識の影響がみられた。中国人日本語学習者は日本語母語話者のように聴覚的なイメージに基づいて擬音語を理解することができず，また，中国語で似ている発音の擬音語から意味を類推することも難しいので，語彙知識として習得することになり，それが日本語学習者の語彙知識に反映されたのであろう。

一方，全体的に擬態語の正答率が低かった。擬態語の習得は，語彙知識が最も強い要因であった。特に語彙知識に乏しい中位群・下位群の学習者は擬態語の正答率が低かった。また，一見すると逆傾向と思われるような語彙知識の違いによる音韻類似性の影響がみられた。これは，日中の擬音語の音韻類似性も擬態語の習得に影響を与えていると考えられる。「ばんばん」と「がんがん」の２語は，音韻類似性が高いにもかかわらず，擬態的な意味を理解するのがきわめて難しかった。「ばんばん」（擬音語が 69.3％－擬態語が 12.2％＝57.1％の差）と「がんがん」（擬音語が 86.3％－擬態語が 35.9％＝50.4％の差）の擬音語と擬態語の使用での正答率の差は 50％以上であった。これには２つの理由が考えられる。一つは，音韻類似性が高い場合には，語彙知識の上位群・中位群・下位群にかかわらず，中国人日本語学習者は中国の発音に似た擬音語“梆梆/bang bang/”と“咣咣 /guang guang/”がすでに存在しており，それぞれ「ばんばん」と「がんがん」と発音が似ているため，日本語でも擬音語としてのみ解釈して，擬態語としての使用を想定しなかったためではないかと思われる。もう一つは，日本語学習者が高音韻類似性の日本語の擬音語をすでに習得しているとすれば，同じオノマトペが擬態語としても使用できるとは考えなかったからではないかと思われる。既知の擬音語が擬態語として提示されると，擬態語のほうは誤っていると判断し，結果として擬態語の理解を抑制するように影響して，正答率を低くする結果になったと考えられる。

構造方程式モデリングで触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペの習得について因果関係の解析を行った。SEM の分析結果を，図１に示した。モデルの標準化推定値はすべて高く，0.1% 水準で有意であった。まず，観測された名詞，形容詞，動詞，機能語という 4 つの独自因子（unique factor）から語彙知識という共通因子（common factor）を説明する因子分析を行った潜在変数の語彙知識を構成する名詞，形容詞，動詞，機能語の標準推定値がそれぞれ 0.85，0.75，0.85，0.77 と高かった。語彙知識から触覚オノマトペの習得（β=.46, p<.001）へ，および語彙知識から触覚以外のオノマトペ（β=.35, p<.001）への間には有意な因果関係がみられた。語彙知識が触覚オノマトペの習得と触覚以外のオノマトペの習得を別々に支えていることが示された。以上の SEM による因果関係の解析結果からわかるように，触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペの習得には有意な因果関係がない。第 2 言語におけるオノマトペの習得には，「触覚から触覚以外へ」

の習得の連続性がないと考えられる。

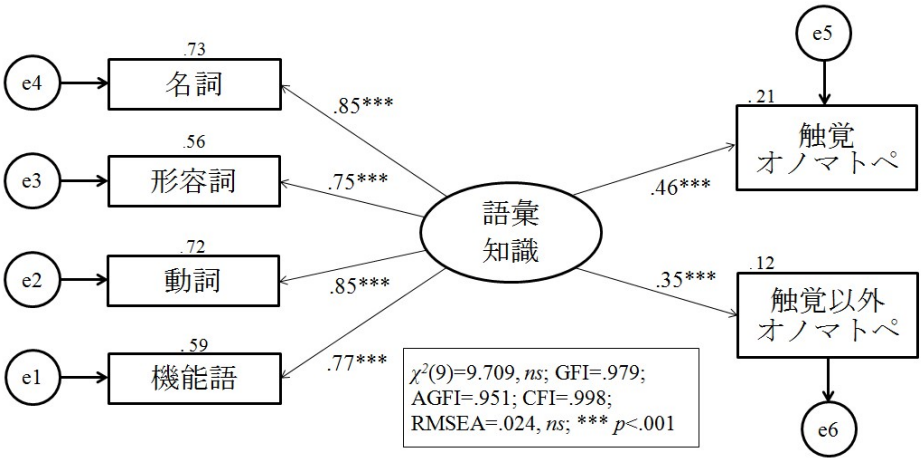

図１　SEM によるオノマトペの習得における因果関係

注：*N*=141. *** *p*<.001. 矢印の数値は標準化パス係数（*β*）を示す。

オノマトペは，メタファー・メトニミーなどに動機づけられて，語彙は具体的・身体的経験から抽象的概念・心的事象へと意味拡張して多義語となると仮定されている（山梨, 2012；深田他, 2008）。これが，第 2 言語（外国語）における日本語のオノマトペの習得においても一般化できるかどうかを，プロトタイプとしての触覚オノマトペから，その拡張と想定される触覚以外へとオノマトペの習得に連続性があるかどうかを検証した。中国人日本語学習者が日本語のオノマトペを習得する場合，語彙知識が触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペの習得を個々に独立して促進しており，「触覚から触覚以外へ」というオノマトペの意味拡張による習得の連続性はみられない。本研究の結果から，第 1 言語と第 2 言語におけるオノマトペの習得プロセスは異なる可能性があると考えられる。第 2 言語習得の場合，中国人日本語学習者は音象徴への感受性によりオノマトペを習得しているとは考え難く，逆に，一般語彙の習得がオノマトペの習得を促進していると言えよう。そのため，教室内の習得を主とする中国人日本語学習者は日本語を母語とする幼児のように個々のオノマトペに対する感性が培われる幼少期を持たないため，上級日本語学習者であっても，日本語オノマトペの意味を十分に理解して正しく使えないようである（張, 1989；中石他, 2011）。そのため，日本語のオノマトペの語彙習得という観点からは，飯田他（2012）が指摘しているように，中国人日本語学習者はオノマトペを一般的な語彙として学習しているのではないかと思われる。

本研究の結論として，日本語を母語とする幼児は意味拡張によってオノマトペの多義性を習得していると思われるが，このようなオノマトペの多義性が，第 2 言語習得の条件では，認知言語学で言われているような意味拡張による習得にしたがっていないことが示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　22件／うち国際共著　8件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 李ロ・玉岡賀津雄	４．巻 60
２．論文標題 中国語版「自閉症スペクトラム指数（AQ）」の開発	５．発行年 2019年
３．雑誌名 音声言語医学	６．最初と最後の頁 314-324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 黄叢叢・玉岡賀津雄・小森和子・毎育新	４．巻 27
２．論文標題 中国人日本語学習者による連語習得に関わる背景要因	５．発行年 2019年
３．雑誌名 小出記念日本語教育研究会論文集	６．最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 李ロ・玉岡賀津雄	４．巻 10
２．論文標題 中国人日本語学習者の間接発話行為の理解―慣習性と習熟度の影響―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中国語話者のための日本語教育研究	６．最初と最後の頁 12-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 玉岡賀津雄・張セイイ・牧岡省吾	４．巻 21
２．論文標題 日本語は無生名詞主語の自動詞文が好まれる言語か？―日本語文の主語となる有生・無生名詞の頻度比較―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日中言語対照研究論集	６．最初と最後の頁 124-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Goss, S. J. & Tamaoka, K	4．巻 35
2．論文標題 Lexical accent perception in highly-proficient L2 Japanese learners: The roles of language-specific experience and domain-general resources	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Second Language Research	6．最初と最後の頁 351-376
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0267658318775143	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Mansbridge, M. P. & Tamaoka, K.	4．巻 35
2．論文標題 Ambiguity in Japanese Relative Clause Processing	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6．最初と最後の頁 75-136
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Tamaoka, K., & Mansbridge, M. P.	4．巻 155
2．論文標題 An Eye-tracking Investigation of Pre-head and Head-driven Processing for Scrambled Japanese Sentences	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語研究	6．最初と最後の頁 35-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Mu, X., Koizumi, M., & Tamaoka, K.	4．巻 155
2．論文標題 Differentiating subjects from VP-adjuncts: A psycholinguistic case study of kara-marked NPs	5．発行年 2019年
3．雑誌名 言語研究	6．最初と最後の頁 159-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 ホアーン ティ ラン フォン・玉岡賀津雄・于 劭贇	4．巻 33
2．論文標題 日本語とベトナム語で共有される２字漢字語の客観的な音韻類似性指標の開発	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ことばの科学	6．最初と最後の頁 133-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.33.133	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 李ロ・玉岡賀津雄	4．巻 33
2．論文標題 中国人日本語学習者による間接発話行為の理解と対応	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ことばの科学	6．最初と最後の頁 35-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.33.35	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大和祐子・玉岡賀津雄・斉藤信浩	4．巻 33
2．論文標題 多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)を基にした日本語のストーリーライティング評価基準の開発と評価	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ことばの科学	6．最初と最後の頁 55-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.33.55	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 于劭贇・玉岡賀津雄・ホアーン ティ ラン フォン	4．巻 33
2．論文標題 日韓中越 4 言語における 2 字漢字語の音韻類似性に関するデータベースおよび検索エンジンの構築	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ことばの科学	6．最初と最後の頁 75-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.33.75	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 楊艶萍・玉岡賀津雄・張セイイ	４．巻 33
２．論文標題 中国人日本語学習者の文法能力は作文の語彙特性にどう影響するか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ことばの科学	６．最初と最後の頁 147-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.33.147	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 馮亜静・玉岡賀津雄	４．巻 21
２．論文標題 中国人日本語学習者の「触覚から触覚以外へ」の意味拡張によるオノマトペの習得の連続性に関する検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 第二言語としての日本語の習得研究	６．最初と最後の頁 7-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 馮亜静・玉岡賀津雄	４．巻 9
２．論文標題 中国人日本語学習者による擬音語と擬態語の習得に影響する要因.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国語話者のための日本語教育研究	６．最初と最後の頁 35-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 玉岡賀津雄	４．巻 9
２．論文標題 ３言語間の語彙的結合－中国人日本語学習者によるL3日本語の外来語処理におけるL1中国語とL2英語の影響	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国語話者のための日本語教育研究	６．最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 張セイイ・玉岡賀津雄	4．巻 20
2．論文標題 中国語母語話者による“在”と“有”構文における定・不定の認知	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日中言語対照研究論集	6．最初と最後の頁 147-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 張セイイ・玉岡賀津雄・初相娟	4．巻 9
2．論文標題 中国人日本語学習者は日本語の漢字の書き取りが正しくできるのか？	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中国語話者のための日本語教育研究	6．最初と最後の頁 52-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yu, Shaoyun and Tamaoka, Katsuo	4．巻 4
2．論文標題 Age-related differences in the acceptability of non-canonical word orders in Mandarin Chinese	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Lingua Sinica	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s40655-018-0035-x	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 玉岡賀津雄・張セイイ・牧岡省吾	4．巻 31
2．論文標題 日本語自他対応動詞36対の使用頻度の比較	5．発行年 2018年
3．雑誌名 計量国語学	6．最初と最後の頁 443-460
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Kiyama, Sachiko, Verdonschot, Rinus, Xiong, Kexin and Tamaoka, Katsuo	4．巻 47
2．論文標題 Individual mentalizing ability boosts flexibility toward a linguistic marker of social distance: An ERP investigation	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Journal of Neurolinguistics	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jneuroling.2018.01.005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 玉岡賀津雄	4．巻 10
2．論文標題 日本語教育におけるローマ字使用の有効性	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ことばと文字	6．最初と最後の頁 1230133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 玉岡賀津雄・張セイイ・佐藤俊樹	4．巻 32
2．論文標題 日本語における二重対格制約の心理的実在の検討	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ことばの科学	6．最初と最後の頁 115-129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Xiong, K., Verdonschot, R. G., & Tamaoka, K.	4．巻 55
2．論文標題 The Time Course of Brain Activity in Reading Identical Cognates: An ERP Study of Chinese - Japanese Bilinguals	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Journal of Neurolinguistics	6．最初と最後の頁 online first
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jneuroling.2020.100911	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Yu, S. & Tamaoka, K.	4．巻 1
2．論文標題 Trade-off effect in the processing of Korean case-drop sentences: An eye tracking investigation	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Human Behaviour and Brain	6．最初と最後の頁 49-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.37716/HBAB.2020010203	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Ito, N., Tamaoka, K. & Michael, M. P.	4．巻 10
2．論文標題 A Picture-Book Based Corpus Study on the Acquisition of wh-words in Japanese	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Glottotheory. International Journal of Theoretical Linguistics	6．最初と最後の頁 85-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/glot-2019-0004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Akita, K., Zhang, J., & Tamaoka, K.	4．巻 2
2．論文標題 Systematic Side of Sound Symbolism: The Case of Suffixed Ideophones in Japanese	5．発行年 2020年
3．雑誌名 KLS Selected Papers	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 李ロ・玉岡賀津雄	4．巻 11
2．論文標題 中国人日本語学習者による間接発話理解の速さと正確さへの影響要因	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中国語話者のための日本語教育研究	6．最初と最後の頁 44-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 玉岡賀津雄	４．巻 34
２．論文標題 外国人日本語学習者850名の日本語能力から説明文の品詞別産出頻度への因果関係	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ことばの科学	６．最初と最後の頁 45-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18999/stul.34.45	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 Yu, Shaoyun and Katsuo Tamaoka
２．発表標題 The Online Processing of Case-drop Sentences in Korean: An Eye Tracking Investigation
３．学会等名 2019 International Society of Neuroscience (ISON) Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mansbridge, Michael P. and Katsuo Tamaoka
２．発表標題 Anaphora resolution by Japanese learners of English: Constrained by syntax and semantics
３．学会等名 CUNY 2019 32nd Annual CUNY Conference on Human Sentence Processing（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tamaoka, Katsuo
２．発表標題 How do native speakers process sentences with little lexical conceptual information?: An eye‐tracking investigation on processing for Japanese scrambled sentences
３．学会等名 International Symposium on Bilingual Processing in Adults and Children 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Zhang, Jingyi, Katsuo Tamaoka and Lu Li
２．発表標題 Phonological similarity effects on lexical decision for aurally-presented Japanese-Chinese cognates by native Chinese speakers learning Japanese
３．学会等名 International Symposium on Bilingual Processing in Adults and Children 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tamaoka, Katsuo Tamaoka and Michael P. Mansbridge
２．発表標題 Processing (non)derivational L2 Japanese verbs by L1 Chinese and Korean speakers
３．学会等名 International Symposium on Bilingual Processing in Adults and Children 2018（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 林炫情・玉岡賀津雄
２．発表標題 社会的迷惑行為の認知と注意行動に対する背景諸要因－社会的合意と日本語学習による逆行転移に着目して－
３．学会等名 第21回日本語用論学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 李ろ;・玉岡賀津雄
２．発表標題 中国人日本語学習者の習熟度別にみた慣習・非慣習的な間接発話の理解
３．学会等名 2018年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 金志宣・熊可欣・玉岡賀津雄
２．発表標題 韓国人日本語学習者による漢字語の音韻類似性に基づいた処理方略
３．学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 于劭贇・金志宣・玉岡賀津雄・張セイイ・Hoang Thi Lan Phuong
２．発表標題 ２字漢字語の音韻類似性・音韻的距離に関する日韓中越データベースのオンライン検索エンジンの構築
３．学会等名 2018年度日本語教育学会春季大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 李ろ・玉岡賀津雄
２．発表標題 中国人日本語学習者による間接発話の理解と対応
３．学会等名 中国語話者のための日本語教育研究会 第41回研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 玉岡賀津雄 編	４．発行年 2021年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 193
３．書名 日本語および外国語の実証的言語習得研究	

１．著者名 張セイイ・玉岡賀津雄・王莉莎	４．発行年 2021年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 159
３．書名 ネット時代の中国語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関